

# 私学経営に携わって

原田 善教

学校法人東北学院理事長

2020年4月に一教員から学校法人理事長に就任して約3年が経過し、初めての非キリスト者理事長として取り組んでいることの一部をここでは述べることにしたい。

東北学院は、福音主義キリスト教による人格教育を建学の精神に掲げた1886年創立の仙台神学校を出発点とする。創立5年目にキリスト教普通教育を行う学校として東北学院と改称し、今日に至る。大学・大学院のほか2つの高校と中学校、幼稚園を持つ、収容定員1万4000人の学校法人である。

現在の私立学校を取り巻く状況は厳しいものがある。少子化による人口減少社会の到来は私立学校に危機をもたらし、斜陽産業化している。例えば、日本私立学校振興・共済事業団によると、2022年度の定員割れの私立大学は全体の47・5%に達している。また、現代はVUCAの時代と言われ、先を見通すことがいよいよ難しい時代になっている。こうした羅針盤なき時代における我々の

道標は、私立学校としての強みである建学の精神にほかならない。

大学の大量化とともに教育共同体を形成する教職員の意識に建学の精神は希薄化しつつあり、そこで建学の精神への原点回帰をまず考えるべきこととした。建学の精神を具体的に表現するものとしてスクールモットーをLIFE LIGHT LOVE(神によって与えられた福音に基づき、人々の命のために仕え、人々に光を与えるために働き、人々を自分のように愛する)と明確化し、本院に連なるすべての人々の意識を同調させ「IDENTITY(帰属意識)を高めるとともに、歴史と伝統を表現するブランドマークを新たに設定することにした。このことにより教職員が丸となって危機の時代に取り組む姿勢を醸成できると考えてのことである。

すでに東北学院は、創立130周年の2016年に中期計画「TG Grand Vision 150」を公表し、創立150周年に向けた新し

いTIGブランドの構築を目指す東北学院の姿を明確に示し、そこに至る5年ごとの4期に区分した20年間のロードマップを提示している。

現在は第Ⅱ期中期計画の途上にあるが、「IG IDENTITY」の強化を意識したのは、第Ⅰ期中期計画の中間検証の際に教職員の認知度の低さが課題として明らかとなったからであった。

第Ⅰ期の総括をふまえた第Ⅱ期中期計画では、本院及び各設置学校の将来像の一層の明確化や数値目標の設定などの改善策を盛り込み、進捗管理に取り組んでいるところである。ガバナンスを強化し帰属意識を高めて計画が順調に進むものと考えている。この中期計画の核心に大学キャンパス整備事業があり、2022年10月に新しい大学キャンパスが都市型キャンパスとして竣工した。なお、大学キャンパス等の詳細は大西晴樹「新しい酒は新しい革袋に盛れ」(『大学時報』No.407)を参照されたい。

私立学校の多様性や独自性はそれぞれの私立学校の持つ建学の精神に由来し、そうし

た私立学校の多様性は我が国の教育の多様性を保証するものである。人を育てることは国の基であり、無資源国日本にとって人材の育成こそが重要な政策であり、先進国で最低レベルの国の教育支援をさらに充実させていくことが望まれる。そのためには私立学校が教育機関として社会から認知、評価されることが重要であり、そのことを自ら社会に対して積極的に示していかなければならない。したがって、情報開示と自律したガバナンス体制の構築が不可欠であると考えている。その意味で、ガバナンスコードの設定が私立学校を一律に縛るお仕着せのものとならないことを願っている。また、1990年代以降の規制緩和を主とする大学改革路線が、補助金による様々な誘導政策とともに「内部質保証」による規制強化へと転換されたことも憂慮するものである。なぜなら、すべては建学の精神に基づき私立学校の自律的な取り組みが何よりも重要であると考えているからである。